＜論文＞

社会階級論の磁場の中のゴフマン社会学
―彼の最初の公刊論文（1951）に関する一考察―

薄　井　　明*

抄　録：博士論文（1953年）で「相互行為秩序」論を定式化する以前に、ゴフマンは２つの論文を学術雑誌に投稿している。ところが、私たちの抱く予想に反して、彼の最初の公刊論文（1951年）は２番目の公刊論文（1952年）とテーマおよびスタイルを異にし、それぞれの論文を書いたゴフマンと博士論文を書いたゴフマンとは、３人ともがまるで別人のようにみえるのである。私たちを戸惑わすこうした外見的な異質性は、各論文が書かれたときの対人的、生活史的、学術的なコンテクストの違いから主に生じているのであって、３つの論文の背後には理論的な連続性が存在している。それらのうち、1951年の論文「階級ステイタスのシンボル」は「ゴフマン社会学」との関連性が見出しにくい論文であるが、その原因は、この論文が学術上だけでなく私生活上も社会階級論の「磁場」の中で書かれたことにある。それらの影響を考慮して見てみると、階級シンボルを扱っているこの論文においてさえゴフマンの「相互行為秩序」論はすでに誕生し、着実に発展していることがわかる。

キーワード：ゴフマン社会学、階級ステイタスのシンボル、相互行為秩序

１．序―問題提起

社会学者ゴフマン（Erving Goffman）の生涯にわたる研究テーマとなった「相互行為秩序」論は、1953年12月にシカゴ大学に提出した博士論文「ある島コミュニティにおけるコミュニケーション行為（Communication Conduct in an Island Community）」（Goffman 1953b）で定式化されている。これ以降の彼の著作の大部分は、この博士論文の展開または精緻化の産物だといってよい。

ところで、ゴフマンは博士論文以前に２つの公刊学術論文を書いている。1951年12月に*The British Journal of Sociology*に掲載された公刊論文「階級ステイタスのシンボル（Symbols of Class Status）」（Goffman 1951）と、1952年11月に*Psychiatry*誌に掲載された公刊論文「“カモ”をなだめることについて：失敗に対する適応の諸相（On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure）」（Goffman 1952b）である。

これら２つの論文は、時期としては博士論文の前々年と前年に公刊されているにもかかわらず、博士論文との直接的な関連性が見出しにくい内容になっている。また両公刊論文も互いにテーマがかけ離れており、一見して共通点がないかのように思われる。そのため「ゴフマン社会学の形成史」という文脈でこれら２論文が論じられることはほとんどなく[1]、３つの論文がゴフマンの著作リストに年代順にただ並べられている状態が長く続いてきた。これらの論文が「一見したところ全く異質な話題を扱っている」（Smith 2006 : 18）ことが、シェトランド調査期（1949年12月から1951年５月）のどこかの時点でゴフマンが「突然」に近い形で「相互行為秩序」論を発想したという不自然な説（Winkin 1988 : 53 ; Smith 1999 : 1）を生み出す原因になっている。

ゴフマン社会学の形成過程をこのように理解することの不自然さに対して、筆者は、ゴフマンが修士論文（1949年12月提出）において実質的に「相互行為秩序」論に問題圏に足を踏み入れており、博士論文以降で本格的に展開される諸概念を先取りしていたという仮説を提示した（薄井 2011）。そして、ゴフマン固有の社会学的視角が形成されていたことが気づかれなかった原因は、TAT〔主題統覚検査〕による調査から彼が研究を開始したことが結果的に足枷となり、それとの格闘が前面に出ていることにあると筆者は理解した。ここから導き出されるのは、当該論文が執筆された社会的・対人的コンテクストおよび学術的コンテクストを参照しながらでないとその論文の適切な読解と評価はできないという、当然で

＊大学教育開発センター

はあるが忘れがちな指針である。

本論文では、この指針に沿って、ゴフマンの最初の公刊学術論文である「階級ステイタスのシンボル」[以下「階級」論文] を取り上げ、「相互行為秩序」論の形成史の中でどのように位置づけられるかを論じる。まず、「階級」論文が執筆された重要なコンテクストとして、当時のゴフマンの研究上および私生活上の環境が「社会階級」論に引きつける“磁場”を形成していたことを叙述し、加えて「階級」論文が彼の最初の公刊学術論文であったことの影響を確認する。次に、従来の研究における「階級」論文に対する位置づけ方の問題点を指摘する。これら「階級」論文が受けた影響を除去し、同論文に対する偏った読み方を回避しながら、「ゴフマン社会学」たる「相互行為秩序」論が「階級」論文の段階においてどの程度まで形成されていたかについて新たな仮説を提示する。筆者はこの問題を、「システム」概念の早期からの採用、「作業上の合意」概念の前駆的な出現、「他者に関する情報」の基本的な理解、「対面的相互行為」場面への注目、「内集団の連帯と外集団の差別・排除」という構図の取り入れの４つの面から考察する。その過程で同時に、ゴフマンの理論展開の多焦点性・多面性という特徴を指摘することによって、「謎めいた」(特に最初期の）ゴフマン像の「謎」の一定部分を理解可能なものにしていくことを試みる。

２.「階級」論文執筆のコンテクスト

（１）「階級」論文執筆の経緯

1945年秋にシカゴ大学社会科学部の大学院修士課程に入ってきた23歳のゴフマン[(2)]は、入学後１年間ほどは、第二次世界大戦終結直後で劣悪だった教育環境も手伝ってか（Fine & Manning 2000 : 38)、大学院生活にうまく適応できず、一種のスランプに陥っていたようである。しかし、入学から１年が経った1946年秋には、ロイド・ウォーナー（W. Lloyd Warner）の「社会経済的地位とパーソナリティ」研究に沿った修士論文を書こうとハイド・パーク地区の主婦50名を対象に面接とTATを実施しており、徐々に活動的になっていったことが窺われる。1947年になると、幼なじみで同じユダヤ人のメンドロヴィッツ（Saul L. Mendlovitz）とシカゴ大学の大学院で再会し、彼を介してガスフィールド（Joseph Gusfield)、ベッカー（Howard S. Becker)、コーンハウザー夫妻（Bill Kornhauser & Ruth Kornhauser）らのグループに紹介された（Mendlovitz 2009)。このように院生間の人間関係も豊かになり、特にメンドロヴィッツとは週に二、三度安酒場で夜中まで学問的な議論を交わすなど学生生活は充実していったが（ibid.)、修士論文には難儀していた（薄井 2011)。ゴフマンが修士論文を提出するまでに、さらに２年余りの歳月を要することになる。

そして、大学院４年目に入った1948年秋学期にゴフマンはバージェス（Ernest W. Burgess）のセミナーを履習し、「社会組織におけるステイタス・シンボルの役割（The Role of Status Symbol in Social Organization)」という題のレポート［以下「ステイタス」レポート］を提出している。ゴフマンの「階級」論文を「完成稿」とすれば、この「ステイタス」レポートは「初稿」にあたる文章であり、ゴフマンの学術的著作で確認できる最初のものである。彼はこのレポートを基に1949年のシカゴ大学社会調査学会の年次大会で報告し（Goffman 1951 : 294)、それをさらに推敲して1951年の「階級」論文に仕上げていったのである。ただ、残念ながら、中間に位置する年次大会での発表原稿は発見されていない。

シカゴ大学時代のゴフマンの学究生活や私生活について時系列的には詳しく解明されていないので、ここで、「階級」論文の執筆を軸としたゴフマンおよび関係者の行跡を整理しておこう（以下で論じる事項も含む)。基本的に（薄井 2011 : 69）を再録したものだが、新たに判明した事柄を加えてある。下線を付した箇所は「階級」論文に直接関係する事柄である。

1948年

９月、後に妻になるアンジェリカ［後述］がシカゴ大学社会科学部の大学院修士課程に入学してきたと思われる。<u>秋学期、バージェスのセミナーで「ステイタス」レポート（Goffman 1948）を提出する</u>。

1949年

（時期不詳だが10月以前の可能性大）<u>シカゴ大学社会調査学会の年次大会で、「ステイタス」レポートを基に「階級」論文の原稿を発表する</u>。10月、ウォーナーの紹介でスコットランドのエディンバラ大学社会人類学科の助手になる。12月、シカゴ大学に修士論文「絵で描写された経験に対する反応の諸特徴」(Goffman 1949）を提出する。同月、博士論文の調査地シェトランド諸島のアンスト島（Unst）に到着する。以後１年半のうち12か月をこの島で過ごす。

1950年

２月頃、滞在していたアンスト島のホテル近くのコテージを買い上げてそこに住み始める。４月から５月、ウォーナーがエディンバラ大学で「アメリカ人の生活構造」について講義をする。12月、アンジェリカが修士論文「上流階級の女性たちのパーソナリティ傾向」(Choate 1950）をシカゴ大学に提出する。

1951年

５月、アンスト島での調査を終え、博士論文執筆のためパリに滞在する。パリにはおそらくこの年の暮れまで滞在する。12月、「階級」論文（Goffman 1951）が*The British Journal of Sociology*に掲載される。（時期不明だが年末の可能性大）シカゴ大学社会学科が主催したファカルティ・セミナーの一環であったウォーナーのセミナーに参加する（Goffman 1959 : 42）。

1952年

５月、指導教官のウォーナーやヒューズ（Everett C. Hughes）らに「博士論文の主題文の草稿」（Goffman 1952a）を提出する。このときのタイトル（仮題）は「自己自身を他者に表出するときの社会的諸ルール」であった。６月、アンジェリカと結婚し、その後夫妻は２、３か月をパリで過ごす（Raab 2008 : 126）。11月、論文「“カモ”をなだめることについて：失敗に対する適応の諸相」（Goffman 1952b）が*Psychiatry*誌に掲載される。（1952年のおそらく秋から1953年）フォード財団の助成金を受けたシカゴ大学社会科学部の「社会階層の命題目録のためのプロジェクト」に研究助手として参加する。

1953年

２月、ウォーナーが学外に設立した民間の社会調査会社（Social Research Inc.）からゴフマンの調査報告書「サービス・ステーション・ディーラー：人とその仕事」（1953a）が出される。春、博士論文の口頭試問が行われる。12月、シカゴ大学に博士論文「ある島コミュニティにおけるコミュニケーション行為」（Goffman 1953b）を提出する。

（２）「社会階級」論という“磁場”の存在

1948年の「ステイタス」レポート（「社会組織におけるステイタス・シンボルの役割」）と1951年の「階級」論文（「階級ステイタスのシンボル」）を見比べたときに最初に気づくのは、後者において「社会階級」という視点が前面に出てきている点である。この力点移動は本文中の用語法に端的に現れている。すなわち、「ステイタス」レポートで用いられている「集団（group）」という用語は「階級」論文において大部分が「階級（class）」に置き換えられている。次の２つのセンテンスは、わかりやすいその用語変更の例である。

> Hence, the behavior style of a **group**, that is, the manner of its members, is psychologically difficult for those whose life experience took place in some other **group**s.
>
> （Goffman 1948 : 11）［ボールド体は引用者、以下同様］
>
> ↓
>
> The style and manners of a **class** are, therefore, psychologically ill−suited to those whose life experience took place in another **class.**（Goffman 1951 : 300）

このような用語の変更にみられる力点の移動は、直接的には、ゴフマンの当時の師ウォーナーの指導の結果であろう。短く見積もっても1946年秋から1953年冬までゴフマンは、「ヤンキー・シティ」研究で知られる社会階級研究の第一人者ウォーナーの指導下にあった[3]。ゴフマンが「階級」論文の執筆過程でウォーナーの指導を受けたことは、論文の脚註にある謝辞―「著者は、方向づけをしてくれたことに対しW・ロイド・ウォーナーに感謝する」（Goffman 1951 : 294）―によって裏付けられる。そして、「ステイタス」レポート（1948年）がシカゴ大学社会調査学会での発表（1949年）を経て「階級」論文へと仕上げられていく時期は、ウォーナーの紹介でゴフマンがエディンバラ大学社会人類学の助手の職に就く時期（1949年10月）と重なる。この点からも、２人の師弟関係の近さは十分に推測できる。

「ステイタス」レポートは、「個人の解体と社会の解体（Personal and Social Disorganization）」をテーマとするバージェスのセミナーで提出したレポートであった。このレポートで用いられている「ステイタス・シンボル」という語の大部分は、現在の一般的な用法と同じく、上の階級が下の階級に対してその優越性を示す階級区別の表徴を指している。このレポートを下敷きにし、ウォーナーの指導を受けて手直ししていったとすれば、単に「集団」ではなく「階級集団」または「階級」に焦点が当てられていくのは当然の流れである。

また、「集団」から「階級」への用語の変更には、概念の細分化も関係している。「ステイタス」レポートでゴフマンは「階級シンボル（class symbols）」に近い意味で「ステイタス・シンボル」の語を用いていたが、「ステイタス・シンボル」には「階級シンボル」と、それとは異なる「職業上のシンボル（occupational symbols）」が含まれることに気づき（Goffman 1951 : 296）、前者を後者から区別するために「階級ステイタスのシンボル」の用語を導入した。これらの結果、彼は1951年の論文タイトルを「階級ステイタスのシンボル（Symbols of Class Status）」にしたと考えられる。

しかし、こうした事情以外で、この時期にゴフマンが「社会階級」論に傾斜していった重要な契機として、後に妻になるアンジェリカとの出会いとその影響が考えられる。彼女の名前は、「批評してくれたことに対しロ

バート・アームストロング、トム・バーンズ、アンジェリカ・チョートに感謝する」(Goffman 1951 : 294)［傍点は引用者］という形で論文の脚註に挙げられている。

アンジェリカ・スカイラー・チョート（Angelica Schu-yler Choate）は、ボストンの旧家に父ロバート・B・チョート（Robert B. Choate）、母キャサリン・S・チョート（Katharine S. Choate）の第３子として、1928年12月31日に生まれた。アメリカにおけるチョート家は、1643年にマサチューセッツに入植したジョン・チョート（John Choate）を始祖とするきわめて由緒のある家柄で、40余りの「ボストン・ブラーミン（Boston Brahmins）〔米国で最も古い歴史をもち、高い社会的・教育的地位にある名門家族〕」の１つに数えられる。当時、父ロバートは『ボストン・ヘラルド＆トラベル』紙の主筆で経営者であったほか、ジョン・F・ケネディ（John F. Kennedy）が卒業生であることで有名なプレップ・スクールのチョート校（The Choate School）も所有していた。

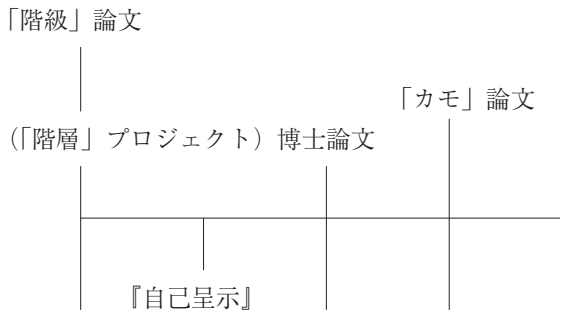
こうした名家の令嬢アンジェリカがシカゴ大学の社会学科修士課程に入学してきたのは1948年９月だったと推定される[4]。1950年12月にはウォーナーの指導の下に修士論文「上流階級の女性たちのパーソナリティ傾向」（Choate 1950）を提出している。この修士論文でゴフマンの修士論文（1949年12月提出）の見解を複数箇所で引用し（Choate 1950 : 3, 20）、文献表に挙げている点から考えると、遅くとも1950年初め頃までに２人の間で深い知的交流が始まっていたと推断できる。加えて、1952年６月に彼らが結婚したことは確実であるから、ゴフマンのスコットランド行き（1949年10月から）を考慮して逆算すると、1948年９月から1949年９月のどこかの時期に２人が知り合って、交際にまで発展していったと考えるのが妥当であろう[5]。

そして、「階級」論文で謝辞に名を連ねるほどの影響をアンジェリカとの出会いと交際から彼が受けたとすれば、その影響として、上位中産階級〔中層上位階級〕(upper–middle class）の教育を受けたゴフマンが初めて超上流階級〔上層上位階級〕(upper–upper class）の生活の実態に直に触れることによって「階級シンボル」への関心が再度強くなったか、あるいは「階級シンボル」論をより実態に近いものに精緻化する上で有用な情報を直接入手したかの２つの可能性が考えられる。前者なら1948年の「ステイタス」レポートの執筆段階でアンジェリカの影響があったことになり、後者なら1949年のシカゴ大学社会調査学会での発表以降に彼女の影響があったことになるが、そのどちらであったかは推断できない。

ただ、いずれにせよ、すでにトロント大学在学中にゴフマンは若きバードウィステル（Ray Birdwhistell）から階級シンボルを識別する訓練を受けていたので、シカゴ大学時代の当初から階級シンボルへの関心はあったはずである。その訓練とは、例えば飲食店にいる他の客を対象に選び、服装や酒の飲み方はもちろん、靴底の状態を学生に観察させて、その客が社会階層において「上層上位／上層下位／中層上位／中層下位／下層上位／下層下位」のどこに属しているか言い当てさせるものであった（Winkin 1999 : 23–24）。シカゴ大学入学後のゴフマンは、バードウィステルの師であり自らの師でもあるウォーナーの「社会経済的地位とパーソナリティ」研究に対しては、TATを用いた方法論等に疑問を抱いていったため、距離をとった内容の修士論文を提出している（薄井 2011）。しかし、ゴフマンが「社会階級」の問題圏から離反していったわけではない。変則的な形ではあるが、彼の修士論文は「階級とパーソナリティ」という問題圏に収まっていた。また博士論文を仕上げている1952年から1953年にかけて、彼はシカゴ大学のシルズ（Edward A. Shils）を統括者とする「社会階層の命題目録のためのプロジェクト」[以下「階層」プロジェクト］の研究助手を務めている。このときの研究成果を最初の著書『日常生活における自己呈示』[以下『自己呈示』]に活用していることを、彼は「謝辞」に記している。

> 「ここに呈示する研究報告は、エディンバラ大学の社会人類学科と社会科学研究委員会のために着手した相互行為に関する研究（a study of interaction）と、フォード財団の助成金を受けシカゴ大学のE･A･シルズ教授を統括者として進められた社会階層の研究（a study of social stratification）と関連して生まれてきたものである。」(Goffman 1956)［傍点は引用者］

引用文にある「相互行為に関する研究」は、ゴフマンの博士論文を指している。だとすると、彼は、博士論文（1953年12月提出）で定式化される「相互行為秩序」論の構築作業と同時期に、「社会階級」に焦点を当てた研究を並行して進めていたわけである。また「階級」論文と博士論文の間の1952年には、「信用詐欺」をテーマとした２番目の公刊論文「“カモ”をなだめることについて」[以下「カモ」論文］が発表されている。これらの事情を系統図的に表したものが下図（次頁）である。ゴフマンが複数の研究テーマを同時に並行して論究していたことがわかる。こうした多焦点性・多面性という彼の理論展開の特徴を見誤ると、「ゴフマン社会学」をごく一面的に理解してしまう危険性がある。言い換えれば、彼の理論的な「懐の広さ」[6]を知らないと、「群盲象を撫でる」の愚行を演じかねないということである。



ここまでの考察から、1945年頃から1956年頃までのゴフマンは、彼の多様な関心のうちで主要なものとして、「社会階級」に関心を抱いていたといえる。そして1948年の「ステイタス」レポートから1951年の「階級」論文の時期は、超上流階級出身のアンジェリカとの出会い・交際という私生活上の変化の時期と重なっていることから、特に「上流階級の階級シンボル」への関心が強くなっていた可能性が高い[7]。それを傍証するエピソードを、トロント大学からのゴフマンの恋人で彼と一緒にシカゴ大学に進学したボット（Elizabeth Bott）が後に語っている。1947年頃から1949年までのある時期のゴフマンの姿だと思われる[8]。

「知らない人たちの家の夕食に彼［ゴフマン―引用者］を連れていくと、決まって彼はその人たちの書棚を上から下まで見回して、彼らが属す社会階級と文化的な気取りについて聞こえるような声で意見を述べた。」（Bott–Spillius 2010）

また、幼なじみで同じシカゴ大学の大学院生だったメンドロヴィッツは、1947年頃から1951年頃のゴフマンの印象について、「彼［ゴフマン―引用者］は彼が頭に思い描いていた自身の像と一致するような英国紳士（an English gentleman）に本当になりたがっていた」（Mendlovitz 2009）［傍点は引用者］と語っている。加えて、1946年秋に着手しながら1949年12月まで提出が延びた彼の修士論文に、データの性格上かなり均質性を欠く第11章「居間の家具類」が付け足されたと思われることも（薄井 2011 : 71, 72）、この時期のゴフマンが階級シンボルとして「居間の家具類」への関心を強めた[9]と考えると、理解しやすくなる。

3．「相互行為秩序」論の形成史からみた「階級」論文

（1）「階級」論文読解上の留意点

十分な確からしさをもって証明されたとはいえないが、上記の考察から、ゴフマンの「階級」論文は「社会階級」論という“磁場”の中にあったと考えてよいだろう。この論文では「社会階級」の視点が強調されており、多種多様な「記号搬送体（sign–vehicles）」（Goffman 1951 : 294）のうち「階級シンボル」に限定された議論が展開されているということである。

しかも、「階級」論文は、英国の権威ある学術雑誌に掲載されたゴフマンの最初の公刊論文であり、その推敲の過程でウォーナーをはじめ何人かの人たちの助言・批評を受け、構成や内容を修正している。その意味で、形式的にも内容的にも、よりアカデミックに洗練された論文となってはいるけれども、そのせいか、後年の「ゴフマン社会学」らしさは姿をみせていない[10]。

したがって、論の展開を忠実に追っていくオーソドックスな読解方法は、「相互行為秩序」論の形成過程を解明しようとする筆者の観点からは、必ずしも有効ではない。すなわち、一方で「社会階級」論という“磁場”の影響をうまく回避し、他方で学術論文の形式の影響を考慮しながらでないと、「相互行為秩序」論の形成過程を正確に追っていくことはできないということである。

そうすると、読解の基本的スタンスとしては、「階級」論文の主題からやや離れた論述や、主題の流れの中にあっても比較的目立たない箇所にも「相互行為秩序」論の発展の「徴候」が潜んでいるという見方を採る必要がある。この意味では、「階級」論文の個々の部分に着目して、後のゴフマン社会学と関連づけてきた従来の研究も、読解法としては間違いではない。

ただし、問題は、どの概念・用語に、どういう観点から着目するかである。残念ながら、これまでの着目の仕方は偏っているか、少なくとも観点が狭いといわざるを得ない。その代表格が、以下のような「まことしやか」特徴づけである。

「ゴフマン社会学の最初の公刊論文の根底にある関心は、『ステイタス・シンボルが必ずしもステイタスの証明ではないという事実』（1951, p.295）である。彼は続けてこう述べる。『［この］シンボルは、「詐称的な（fraudulent）」仕方で使用されるようになる、すなわち、それを主張する人が実際は所有していない地位を意味するようになる可能性がつねにある』（1951, p.296）。ゴフマン社会学で後に『不実表示』と呼ばれる論点がここで開示されている。」（Gonos 1980 : 143）

「詐称（fraud）と欺瞞（deception）がゴフマンの著作において早期から姿をみせている。それは、ゴフマンの最初の公刊学術論文である『階級ステイタスのシンボル』（1951）で明白になっている。」（Smith 2006 : 18）

これらは、「階級」論文に何度か登場する「不実表示（misrepresentation）」（Goffman 1951 : 296, 297, 298, 303）という語に着目し、それを『自己呈示』における「印象管理（impression management）」の通俗的な理解に直線的に結びつける読み方である。実際のところ、この「不実表示」の語は、彼の最初の著書『自己呈示』において独立した項目のタイトルになっているだけに（Goffman 1956 : 37–44 ; 1959 : 58–66）［邦訳「偽りの呈示」］、このような読み方は一見「妥当」なようにみえる。

しかし、ステイタス・シンボルの不実表示の可能性が何度か述べられているとしても、「階級」論文の主題は、むしろ、そうした不実表示が現実にはどのような形で制限されているかという点にある（「ステイタス」レポートもこの点は同じである）。論文の本体をなす第Ⅱ部で展開されているのは、この不実表示の制限の６つの典型的な仕組み、すなわち「道徳的制限」「内在的制限」「自然による制限」「社会化による制限」「陶冶による制限」「器質性の制限」である。この点からいうと、「階級」論文で実質的に扱われているのは、「階級シンボルの不実表示がいかに難しいか」という問題である。

また、階級シンボルが不実表示される可能性がある一方で、「どの階級シンボルも、その不実表示的な使用を制限する仕組みを１つ以上内包している」（Goffman 1951 : 297）と指摘する彼の議論は、別の見方をすると、種々の制限をクリアできる「本物」の階級シンボルを「まがい物」の階級シンボルから区別する基準を確認する作業であるともいえる。

そして、文脈はやや異なるが、同論文の他の箇所で、階級シンボルの中心的な機能は「不実表示」にはないと述べている。

> 「概して、階級シンボルは、自分の位置を表示したり不実表示する（represent or misrepresent）のに役立つのではなく、むしろそれに関する他者の判断に影響を与え自分が望む方向に導くのに役立つ。」（ibid.）

したがって、「詐称」と「不実表示」を軸として「階級」論文を『自己呈示』に関連づけようとする読み方は、完全に間違いではないにしても、一面的であるといわざるを得ない。上で引用したスミス自身、ゴフマンの博士論文を『自己呈示』の「演出論的アプローチ（the dramaturgical approach）」の前史として解釈しようとする一般的な研究傾向が的外れであることを別の論文で指摘している（Smith 2003 : 656, n.1）。この指摘は、『自己呈示』における「印象管理」概念の特定イメージに引きずられがちなゴフマン研究の傾向に対して有効な「解毒剤」となり得るが、同様の指摘が「階級」論文の読解に際してもなされるべきだと筆者は考える。

（２）「相互行為秩序」論の骨格形成

以上で指摘した、「階級」論文と後の著作との一面的で過度な関連づけに注意しながら、「相互行為秩序」論の形成過程における「階級」論文（および「ステイタス」レポート）の位置づけを考察していこう。この考察に際しては、すでに触れたように、「階級」論文の主題の展開とは切り離して、当該論文の背景に潜む「視角」ないし個別に展開されている「用語」「概念」に着目していくことになる。それを、以下、ａ.「社会システム」と「社会秩序」の視角、ｂ.「作業上の合意」という発想、ｃ.「他者に関する情報」の問題、ｄ.「対面的相互行為」場面への視点のシフト、ｅ.「内集団の連帯と集団間の差別」という構図の順番に見ていくことにする。

ａ.「社会システム」と「社会秩序」の視角

社会階級論の磁場の影響を取り除いたときに「ステイタス」レポートおよび「階級」論文でまず気づくのは、ごく早い時期にゴフマンが社会認識の理論モデルとして「社会システム」論的な視角を採用していることである。下に引用する「ステイタス」レポート冒頭の２番目のパラグラフには、引用符付きで「社会システム（social system）」の語が登場している。（「ステイタス」レポートと「階級」論文で変化していない箇所と変化している箇所を判別しやすくするため、英文のまま引用する。また、共通している語はボールド体で強調する。）

> From one point of view, a “social system” may be defined as a cluster of roles, in so far as these roles are clearly defined, all–embracing, **differentiated** and **integrated into a single whole.**（Goffman 1948 : 1）［下線とボールド体は引用者、以下同様］

1948年秋学期の段階において、この引用符付きの「社会システム」の語が誰に由来するのかという問題[11]は独自の論点となり得るが、ここでは、「ステイタス」レポートの段階でゴフマンが「社会システム」という視角に着目している点だけを確認しておこう。

その後のゴフマンが対面的相互行為を「システム」と見なしていたことは、「統合された諸行為のシステムとしての相互行為（interaction as a system of integrated acts）」（Goffman 1953b : 62）や「対面的相互行為という微細な社会システム（the minute social system of face–to–face interaction）」（Goffman 1959 : 12）、「状況内に置かれた活動のシステム（a situated activity system）」（Goffman 1961 : 96）等の語句から明らかである。

上記のパラグラフに対応する「階級」論文の箇所は書き換えられて、以下のようになっている。「社会システム」の語は姿を消しているものの、基本的な視角は「ステイタス」レポートと変わっていない。

> Co–operative activity based on a **differentiation** and **integration** of statuses is a universal characteristic of social life.（Goffman 1951 : 294）［同上］

この「協働活動（co–operative activity）」という語にはバーナード（Chester I. Barnard）の影響[12]が推測される。ただ、バーナード自身がシステム論の提唱者なので、「階級」論文におけるこの記述も依然としてシステム論の圏内にあると理解することは十分可能である。

また、これらとは別の文脈だが、ゴフマンがデンジンとケラーの論評に反論した発言の中で、「相互行為秩序」論を着想する上で「システム」論的な視角が重要であったこと、そして、その視角の起源がデュルケムとラドクリフ=ブラウンの機能主義にあったと述べている。

> 「何かを研究する場合、最初に、その事柄を、それ自身の価値によって存立し、それ固有のレベルで存立している１つのシステムとして扱うことを目標にするというのが、私の信念である。この先入観は、（……）デュルケムおよびラドクリフ=ブラウンの機能主義という起源から発している。博士論文で対面的相互行為をそれ自身の価値によって存立する１つの領域として扱うことを試み、『相互行為』という用語を偉大な社会心理学者とその追随者が見捨てようと準備していた場所から救い出すのを試みるよう私を導いたのも、この先入観である。」（Goffman [1981] 2000 : 81–82）

この「先入観」（＝基本的視角）の形成期が「ステイタス」レポートにまで遡るか否かはこの引用文から確定できないにせよ、その時期が博士論文提出（1953年12月）以前であることは間違いない。そして、トロント大学時代に彼がデュルケム（É. Durkheim）やラドクリフ=ブラウン（A. R. Radcliffe–Brown）、パーソンズ（T. Parsons）の著作を読んでいた事実（Bott–Spillius 2010）、またパーソンズやマートン（R. K. Merton）の出張講義を聴いていた事実（Winkin 1999 : 24）を重ね合わせると、ゴフマンが1948年時点で「社会システム」論の視角を我がものにしていたという想定は十分あり得る。

そうした推論を別にしても、上記の「ステイタス」レポートおよび「階級」論文の２つの記述内容（特に前者）と、彼の博士論文の分析モデルである「社会秩序（social order）」の概括的な定義（下の引用英文）とは、かなり近いものであることは明白である。

> 1. Social order is found where the **differentiated** activity of different actors is **integrated into a single whole**, allowing thereby for the conscious or unconscious realization of certain overall ends or functions.（Goffman 1953 b : 33）［同上］

ここで過大評価は慎まなければならないとしても、逆に過小評価して、あり得る可能性を排除してしまうことも避けるべきだろう。すなわち、これらの記述の類似性をもって「階級」論文が博士論文の「社会秩序」モデルの水準に近いところまで達していたと結論づけるのは無理な推論である[13]が、一方、「システム」概念を踏まえた「社会秩序」に関する一定のモデルが「階級」論文段階のゴフマンの頭の中にあった可能性を否定する根拠もないのである。この点については、あえて推断を下さず、そうした可能性を開いた状態にしておこう。

ｂ.「作業上の合意」という発想

ゴフマンの「相互行為秩序」論の形成史に「階級」論文を置いたとき次に目に留まるのが、「作業上の合意（a working consensus）」という語の登場である。

この用語が現れるのは、上の「ａ.」での引用文を含むパラグラフ内の１箇所だけであるけれども、その後のゴフマン社会学で鍵概念の１つになるものなので、前後を含めてを引用しておく。

> This kind of harmony requires that the occupant of each status act toward others in a manner which conveys the impression that his conception of himself and of them is the same as their conception of themselves and him. A working consensus of this sort therefore requires adequate communication about conceptions of status.（Goffman 1951 : 294）［下線は引用者］

ここで彼が「作業上の合意」と呼んでいるのは、相互行為において、こちら側での自分の「地位」および相手の「地位」に関する理解の仕方（conception）と、相手側での彼ら自身の「地位」およびこちらの「地位」に関する理解の仕方とが同一であるという想定が行為者相互の印象を通して成立している状態のことである。

この段階では、状況の定義および自他の地位の定義に関する「了解」のレベルにのみ「作業上の合意」が設定されている。その意味で、「階級」論文における「作業上の合意」の概念は「萌芽的な形」（Smith 2006 : 19）だといえる。この概念は、博士論文では「作業上の容認

（a working acceptance）」（Goffman 1953b : 37）と呼ばれ、状況の定義を維持するために不可欠な対面的相互行為おける「寛容（tolerance）」の契機が加味されて、より弾力的な性質が付与されている。そして、これらの議論を踏まえ、『自己呈示』で再び「作業上の合意」として登場する。以下の引用がその論述箇所である。

「ここには一種の相互行為上の暫定協定（a kind of interactional *modus vivendi*）がある。参加者たちが共同して単一の包括的な状況の定義に貢献するが、その状況の定義に含まれるのは、現に存在しているのは何かに関する実際の同意というよりも、一時的に尊重されるのはどの論点か、その論点に関して誰に主張する権限があるかについての実際の同意である。状況の諸定義の間の公然とした対立を回避することが望ましいという点に関してもまた、実際の同意が存在する。私はこの水準の同意を『作業上の合意』と呼ぶことにする。」（Goffman 1956 : 4 ; 1959 : 9–10）

「階級」論文では「前置き」部分で軽く触れられている程度なので、同論文における「作業上の合意」の内実が博士論文や『自己呈示』におけるそれとどの程度近いものになっていたかは、定かではない。ただ、「協働活動（co–operative activity）」の語句と同じパラグラフ内でこの語を用い、しかも「作業上の合意（a *working* consensus）」［傍点とイタリック体は引用者］という語[14]を選んでいる点から判断すると、少なくとも、状況の定義をめぐる相互行為の「実働性」（現に妥当なものとして作動していること）および「暫定性」（場面が続く限りで妥当していること）を自覚しながら、この語を用いているのは確かだと思われる。

c.「他者に関する情報」の機能と類型

そして、「相互行為秩序」論の３つ目の契機として、「他者に関する情報」の問題を見出すことができる。階級シンボルを含むステイタス・シンボルは、記号搬送体の一種であり、さらに一般化すれば「他者に関する情報」（Goffman 1953b : 71）の一部を構成するものである。それが相互行為において果たす機能について、「階級」論文では、次のように述べられている。

「自分の位置を表示する特化された手段が発展することがよくある。そうした記号搬送体は『ステイタス・シンボル』と呼ばれてきた。ステイタス・シンボルは、ある個人に帰属されるべき地位と、他の人たちがその個人を扱う仕方とを、その個人に代わって選択する手がかりとなっている。」（Goffman 1951 : 294）［傍点は引用者］

これに対応する「ステイタス」レポートの論述箇所も主旨はほぼ同じだが、「機能」という語が明示されているという違いがある。

「そのような手段を『ステイタス・シンボル』と呼んでもよいだろう。この定義に含意されるのは、ある人物がもつ役割と、その人物から期待すべき行動を他の人たちに知らせる信号の働きをすることが地位の主要な社会的機能（function）だということである。」（Goffman 1948 : 2–3）［傍点は引用者］

これらの議論は博士論文や『自己呈示』の議論に引き継がれ、「階級シンボル」や「ステイタス・シンボル」という限定は解除されて、「他者に関する情報」全般の問題として扱われている。ただし、それらの情報がもつ対面的相互行為上の「機能」は、基本的に「ステイタス・シンボル」のそれと同一である。

「ある個人が他の人たちの居合わせる状況に入っていくと、通例、他の人たちはその人に関する情報を得ようとするか、その人に関してすでに所有している情報を活用しようとする。彼らが関心をもつのは、その人の社会－経済的地位、自身についてのその人の理解の仕方、彼らに対するその人の態度、その人の能力、その人の信頼性などである。（……）個人に関する情報は状況を定義するのに役立ち、その人が彼らに期待するだろうことや彼らがその人に期待してよいことを他の人たちが事前に知ることを可能にする。このようにして情報を得ることによって、他の人たちは、自分たちが望んだ反応をその人に呼び起こすためにどう行動するのが最善かを知るのである。」（Goffman 1956 : 1 ; 1959 : 1）［傍点は引用者］

階級シンボルを含む「ステイタス・シンボル」は、この引用文中の「その人の社会－経済的地位」を表示する記号搬送体に該当することになる。しかし、対面的相互行為の中で得られ、判断材料として活用される「他者に関する情報」は、もちろん、これだけではない。この引用文で挙げられた事柄に関する情報も含め、数多くの多様な情報が存在している。それら「他者に関する情報」の類型化は、『自己呈示』における「舞台装置（setting）／個人的外面（personal front）」、「個人的外面」を構成する「外見（appearance）」と「振る舞い方（manner）」、「意図的な表出（expressions given）／意図的でない表出（expressions given off）」などをはじめとして、著作ごとに異なる形で類型化と整理がなされている。

そうした類型化の最初の試みとして、ゴフマンは「階級」論文において「カテゴリー的意義（*categorical* signi-ficance）／表出的意義（*expressive* significance）」という二分法を提出している。

「定義上、ステイタス・シンボルはカテゴリー的意義を伝える。すなわち、それは、そこにうまくたどり着いた人の社会的地位を識別するのに役立つ。しかし、ステイタス・シンボルはまた、表出的意義も伝えることがある。すなわち、その地位にたどり着いた人の物事の捉え方、生活スタイル、および文化的な価値も表出することがあるし、特定の社会的位置にある場合に生じる活動の不均衡から創出される欲求を満たすことがある。」(Goffman 1951 : 295)

ここで対比されている意義のうち、階級シンボルの「カテゴリー的意義」の方はわかりやすい。階級シンボルの所有者を階級構造上の外面的な「地位」に配置し、分類する場合がこれにあたるだろう。これに対し、階級シンボルの「表出的意義」の方はややわかりにくい。この場合は、「地位」の背後で展開されるその人の生活スタイルやその人の内面に潜む態度・価値観などが「表に現れ出たとされるもの」を指すと思われる。

後者の「表出的意義」は、彼が修士論文で述べている「ハイド・パーク地区の被験者がもつ、拘束のパターンから部分的に自由になろうとするこの傾向は、居間に対する昔ながらの扱い方に対して彼女たちが距離をとる些細な仕方にも表されている（expressed）」(Goffman 1949 : 76）という議論とも関連していると考えられる。

そして、「階級」論文（および「ステイタス」レポート）では、動詞expressの対語であるimpressを用いて、「表出的意義」を伝える微細な階級シンボルの例を列挙している。

「それ［階級所属を示す重要なシンボル―引用者］は、他の人にその人物の一般的な振る舞い方が適切で好ましいという印象をもたせる（impress）種類の行為から構成される。その場に居合わせる人たちの中にあって、そのような人物は『自分たちと同類だ』と見なされる。この種の印象は、振る舞いの微細な部分に対する反応の上に構築されるように思われる。こうした振る舞いには、エチケット、身なり、立ち居、身振り、イントネーション、言葉遣い、語彙、しぐさ、そして生活の実質および細部に関して自動的に表出される評価が含まれる。」(Goffman 1951 : 300)［傍点は引用者］

博士論文では、「言語的（linguistic）／表出的（expressive）」、「道具的（instrumental）／表出的（expressive）」、「合理的（rational）／表出的（expressive）」等の対比の中で「表出的行動」の位置づけが検討され、４つの命題にまとめられている（Goffman 1953b : 69–70）。そして、「道具的／表出的」の対比に際してラドクリフ=ブラウンの「技術的行為／儀礼的行為（ceremonial acts）」に言及している点（Goffman 1953b : 52）から理解できるように、「表出的行動」という位相は後に詳しく展開される「相互行為儀礼（interaction ritual）」の前駆をなしている。

「階級」論文の段階では、そこまで議論が熟していたとは思えないが、少なくとも「表出的」という独自の位相に着目していたことは確認でき、それが「ある個人が自分自身をどう捉え、他者をどう捉えているか（his con-ception of himself and of them）」(Goffman 1951 : 294）[15] を伝達することを理解していたのも確実である。

ｄ.「対面的相互行為」場面への視点のシフト

あまり目立たないが、「階級」論文には「インフォーマルな相互行為の最中に（during informal interaction）」(Goffman 1951 : 300）や「居合わせている人たちの中にあって（In the mids of those present）」(ibid.）といった表現が出てくる。なぜこれらに着目するかというと、この表現は、ゴフマンがいつ、どのような経緯で「対面的相互行為」場面に注目するようになったのかという問いに対する答えの手がかりになると思うからである。

繰り返し述べているように、ゴフマンが「対面的相互行為」場面を考察の位相として設定し、「相互行為秩序」論を明確に定式化しているのは、1953年12月提出の彼の博士論文においてである。しかし、「対面的相互行為」場面への視点のシフトは、それ以前に徐々に進んでいたと考えられる。

例えば、すぐ上の「階級」論文のパラグラフに対応する「ステイタス」レポート（1948年）にも、「インフォーマルな相互行為」などの語が登場する。

「ある集団に所属していることの１つの証明は、インフォーマルな相互行為の最中に（during informal interaction）、他の成員たちがその人の一般的な振る舞い方が適切で好ましいものだという印象をもつような仕方で振る舞える能力である。そうした成員たちの中にあって（In the mids of the members）、そのような人は『自分たちと同類だ』と見なされる。」(Goffman 1948 : 10)［傍点は引用者］

「ｂ.」の「他者に関する情報」を論じた箇所で触れ

たが、所属階級を識別する上で特に重要となるシンボルが、「エチケット、身なり、立ち居、身振り、イントネーション、言葉遣い、語彙、しぐさ」(Goffman 1951 : 300) など長い社会化の過程を経て初めて身につく微細な振る舞い方である。当該人物の生活スタイルや態度・価値観を伝えるこれら微細な階級シンボルが最も効果を発揮する局面は、言うまでもなく「対面的相互行為」場面であろう。相手が身構えていない状態で、まさに「間近に」観察してこそ、これらのシンボルの「真／贋」が見分けられるからである。その意味で、「階級シンボル」を論じた論文において考察者の視点が「対面的相互行為」場面にシフトしていることが一時的にせよ顕在化したとしても、それは十分に理解できることである。

もちろん、こうした断片的な記述だけを根拠にして、1948年秋学期から1951年冬までの時期にゴフマンが「対面的相互行為」場面に視点をシフトさせていたと判断しているのだとすれば、その推論には無理がある。しかし、こう判断する根拠はそれだけではない。1949年12月提出の修士論文でも、彼は対面的相互行為場面そのものを対象化している。筆者は、彼の修士論文で「ゴフマンは、TAT面接の場面そのものを対象化できる独自のメタ・レベルに視点を“ずらして”いっている」(薄井 2011 : 72) と評価した。ゴフマンのこうした「視角の転回」を考慮した上で改めて「ステイタス」レポートと「階級」論文の記述を見てみると、この時期に彼の視点が「対面的相互行為」場面にシフトしているという推論の蓋然性も低いものではなくなる。

加えて、「ステイタス」レポートで「そうした成員たちの中にあって (In the mids of the members)」であった表現が「階級」論文では「その場に居合わせる人たちの中にあって (In the mids of those **present**)」[ボールド体は引用者、以下同様] となっている。些細な変化にみえるが、ゴフマンが一貫して好んだ言い回し「互いに直に居合わせる状況で (in each other's immediate **presence**)」(Goffman 1953b : 33) [16] と関連させてみると、この変化の意味は小さくはない。しかも、1952年５月に提出した「博士論文の主題文の草稿」で「『他者が居合わせること』の諸効果 (the effects of "presence of others")」に関して文献的な根拠づけを行っていることから (Goffman 1952a : 6–7)、ゴフマンはそれ以前に「他者が居合わせる状況 (the presence of others)」(Goffman 1956 : 1 ; 1959 : 1) という位相を同定していたのはほぼ間違いない。これらの点を加味すると、この表現の微小な変化が、「階級」論文において「対面的相互行為」場面へ視点がシフトしていたことの「徴候」である可能性は十分にある。

ｅ.「内集団の連帯と集団間の差別・排除」という構図

最後に、「階級」論文および「ステイタス」レポートの目立たない構図となり、またゴフマン社会学の「通奏低音」となっていると考えられる構図について指摘しておこう。それが「内集団の連帯と集団間の差別」(Goffman 1948 : 16) という構図である。「階級」論文では、これに関して以下のように述べられている。

> 「ステイタス・シンボルは、社会的世界を、人に関する諸カテゴリーに明瞭に分割し、それによって、同一のカテゴリー内では連帯を、異なるカテゴリー間では敵意を維持するのに役立っている。[それゆえ] ステイタス・シンボルは、集合的シンボル (collective symbols) と区別されなければならない。なぜなら、集合的シンボルは、カテゴリー間の差異を否定し、あらゆるカテゴリーの成員を、単一の精神的共同体に属するという確証の中に引き込むのに役立つものだからである。」(Goffman 1951 : 294–295)

論文の脚註からも明らかなように、この議論の出所はジンメル (G. Simmel) の「流行 (Mode ; fashion)」論である。その要諦は、「流行」が階級区別の所産であって、階級シンボルが同じ階級内の連帯作用と、異なる階級に対する敵対・排除作用という二重の機能を併せもっている点にある (Simmel 1904 : 133–134)。

とかくデュルケムの影響が強調されがちな初期ゴフマンにおいて、デュルケムの「集合的シンボル」とは異なった働きをする「ステイタス・シンボル」にゴフマンが注目し、ジンメル社会学の視角を自らの理論に取り入れた点だけでも興味深い。しかし、この「内集団の連帯と集団間の差別・排除」という構図は、それにとどまらない意義と広がりをもっている。

この構図は、「階級」論文の主題に関する議論の中で具体化されている。上で引用したものだが、強調点を変えて見てみよう。

> 「それ [階級所属を示す重要なシンボル―引用者] は、他の人にその人物の一般的な振る舞い方が適切で好ましいという印象をもたせる種類の行為から構成される。その場に居合わせる人たちの中にあって、そのような人物は『自分たちと同類だ』と見なされる (such a person is thought to be "one of our kind")。」(Goffman 1951 : 300) [傍点は引用者]

ここには「成員資格 (membership)」の識別指標としてのステイタス・シンボルの機能が簡潔に述べられている。すなわち、例えば「この人物は私と同じく本当に上

流階級に属すのか」という判断に際し、俄作り・急拵えが困難な階級シンボル（エチケット・立ち居振る舞い・イントネーション・言葉遣い・語彙・しぐさ等）が識別の重要な判断材料として使われ、それが「本物」と判断されれば「同じ階級仲間」として受け入れられ、「まがい物」と判断されれば「成り上がり者」として軽蔑され排除されるということである。

「階級」論文では前面に打ち出されていないが、階級シンボルの中心的な社会的機能は、人々が種々の記号搬送体を手がかりにして「内集団の成員／外集団の成員」を識別すると同時に、内集団の成員とは連帯し、外集団の成員に対しては差別・排除するという機能にある（Goffman 1948 : 16）。この「識別と連帯－差別」の構図は、「階級」関係に限定されない。そもそも「ステイタス」レポートでは、分析単位は「階級」ではなく「集団」であったから、この構図は小集団も含めたあらゆる「集団」に妥当するはずである。しかも、「ステイタス」レポートでは、行為がもつ秘密の意味を知っていれば参加できる「社会的交際から［それを知らない］人々を排除する（exclude）」（Goffman 1948 : 11）例を挙げ、「社会的交際（social intercourse）」というレベルにもこの構図が適用できる可能性を述べている。

対面的相互行為における微細な記号搬送体の読解を通した「内集団の連帯と外集団の差別・排除」という構図。この構図と、例えばゴフマンの博士論文の第16章「参与からの排除の種類」における「『人でない者』扱い（non–person treatment）」（Goffman 1953b : 223）の構図とは類似している。また、後年ゴフマンが展開した「公共の場における振る舞い」論の構図、すなわち「エチケット」の適切な遂行能力の有無が「集まり（a gathering）の成員＝まともな人／集まりの非成員＝まともでない人」を識別し、後者を排除するという構図とも相似形をなしている。次の文は「まともな市民」としての「成員資格＝会員資格（membership）」を示すことの重要性を論じている箇所だが、ここにみられる構図は、階級シンボルの表示によって階級の成員資格を証明するという「階級」論文にみられる構図と酷似しているといえるだろう。

> 「家族やクラブに属している以上に、階級や性別に属している以上に、そして国家に属している以上に、個人は集まりに属しているのであり、会費を完全に払い込んだその優良会員（a member in good standing）であることを示すことに越したことはない。」（Goffman 1963a : 248）

このように、ゴフマンの「相互行為秩序」論には「内集団の連帯と外集団の差別・排除」という大状況の構図をミニチュア化して対面的相互行為に適用している面がある。この「ミニチュア化」という手法は、ゴフマン社会学の形成において特徴的な手法の１つといえる。すでに述べたように、「社会システム」論の視角をミニチュア化して対面的相互行為に適用しているだけでなく、ラドクリフ=ブラウンがマクロな社会システムの水準で用いた「ユーフォリア（euphoria）／ディスフォリア（dys-phoria）」（Radcliffe–Brown 1952 : 212）の対語をミニチュア化して対面的相互行為の状態記述に用いている（Goffman 1953b : 243 ; 1961 : 44）。

また、「内集団の連帯と外集団の差別・排除」の構図をミニチュア化するだけでなく、さらに「プロセス化」していけば、相互行為への「公式の参加者（accredited participants）／非公式の参加者（unaccredited participants）」（Goffman 1953b : 137–138）の境界の議論や相互行為への「専心（involvement）／疎外（alienation）」というゴフマン固有の問題設定にも近づいていく。そのように考えることができるとすれば、ジンメル社会学がゴフマン社会学に与えた影響は、予想以上に大きいことになる。そして、「境界維持」自体が「システム」存立の必須要件であってみれば、ゴフマンが早い段階からシステム論的な視角を我がものにしていたという「ａ.」で立てた想定は、迂回的な形で、裏付けられることにもなるだろう。

４．結びに代えて

以上、ゴフマンの最初の公刊学術論文が彼の「相互行為秩序」論の形成史においてどのように位置づけられるかを、この論文が書かれた時期の彼の師弟関係、個人的関心および学術論文の制約の影響を考慮しながら、考察した。確定されたとは言い難い仮説や推論も含まれているが、論文内に現れている種々の文言と論文外で起こった諸事実を総合して判断するかぎり、「階級」論文、さらにその基になった「ステイタス」レポートにおいて「相互行為秩序」論の骨格はすでに形成されていたと考えてほぼ間違いないだろう。

先に筆者はゴフマンの修士論文に関する論考の中で、1946年秋に調査を実施しながら途中で停滞していたと思われる論文作成の作業が再び前進した時期を1947年下半期から1949年までの間と推定した（薄井 2011 : 72）。本論文での考察を踏まえると、その時期は1947年下半期から1948年秋までの間に絞り込むことができる。彼の修士論文の転換点となったと思われる第11章「居間の家具類」と「ステイタス」レポート（1948年秋学期）のテーマに強い類縁性が見出されるからである。

しかし、「相互行為秩序」論の形成期は、さらに遡る

可能性がある。その手がかりが、トロント大学時代（1944～1945年）のゴフマンをよく知るロング（Dennis Wrong）の証言である。次の引用文に描かれているのは、1944年夏頃のゴフマンについての印象だと思われる。

「ゴフマンは直観的で純真な人で、社会に対する並外れた観察力をもった小説家であるという観念が流布しているが、それは全く誤りである。私が彼に会ったとき、すでに彼は鋭敏でスケールの大きい理論的な知性をもっていた。彼は私たちの誰より知的にずっと進んでいた。」(Wrong 1990 : 9)［傍点は引用者］

ただ、残念ながら、「ステイタス」レポート（1948年）より前のゴフマンの著作は見つかっていないため、「ゴフマン社会学」がそれ以前に誕生していたかどうかを判断する直接的な文献上の手がかりはない。その場合、文献資料から検討可能な方法は２つである。１つは、本論文で得た仮説を携えて、再びゴフマンの修士論文を読み直す作業である。彼の修士論文用の調査は1946年秋に実施されているので、同論文に1948年秋以前の思考過程の痕跡が残っている可能性もある。もう１つは、「階級」論文の翌年に発表された「カモ」論文（1952年11月掲載）を「相互行為秩序」論の形成史の中で読解する作業である。この論文は、博士論文の前年に出されているだけでなく、その着手時期については1947年頃まで遡る可能性もあることから、「相互行為秩序」論の形成過程を解明する上で重要な文献資料である。

筆者は、次の作業として、後者の「カモ」論文の読解に取りかかるつもりである。博士論文以前に書かれたゴフマンの３論文の問題構成と布置連関をある程度確定した後に再度彼の修士論文を読解していった方が「相互行為秩序」論の形成史における彼の修士論文の位置づけがより正確になるだろう。「カモ」論文の読解に際しては、本論文で確認された最初期ゴフマンの著作の特徴を考慮した読解の指針が要請される。すなわち、各論文とも執筆時に彼が置かれたコンテクストとそれへの対応・適応の仕方の違いによって、あたかも別人がそれを書いているような印象を受けるほどの外観の違いがあるということである。最初期ゴフマンに関する資料がきわめて乏しい現状においては、「群盲象を撫でる」の愚行ではなく、「全体の姿を予想しながら象を撫でていく」作業、すなわち、外見上の相異なる最初期の諸論文の背後にゴフマンの「鋭敏でスケールの大きい理論的な知性」が控えているという想定の下で、各論文の偶発性や状況依存性を除去しつつ、推論を積み重ねて仮説を立てていく作業が不可欠となる。しかし、「象」にあたる「最初期のゴフマン社会学の姿」は、まだぼんやりとした輪郭しか見せていない。

［註］

（１）これら２論文に関して、「人間の行為に関する微細で、ほとんどシニカルに一歩距離をおいた観察」という学術的スタンスや「メタファーの使用」といった方法論に、後のゴフマン社会学に通じる特徴がみられるとの指摘はある（Fine & Manning 2000 : 44）。また２論文のうち、最初の論文（Goffman 1951）に関するゴフマン社会学形成史的な論評として（Gonos 1980）や（Smith 2006）があるが、これらの観点の問題点については、本論文の後のほうで論じる。また２番目の公刊論文（Goffman 1952b）に関しては、示唆に富む若干の解説（Burns 1992 : 13–16 ; Smith 2006 : 19–21）と一定程度まとまった論考（内田 1995）がある。

（２）アーヴィング・ゴフマンは、1922年６月11日にカナダのアルバータ州マンヴィル（Mannville）で生まれた。父マックス（Max）と母アン（Anne）はウクライナ出身のユダヤ系移民であった。アーヴィングが17歳の1939年９月、セント・ジョーンズ技術高等学校（St. John’s Technical High School）の第11学年で、ウィニペグ（Winnipeg）にあるマニトバ大学の学芸学部の第１学年に入学し、「化学」を専攻した。第１・第２学年では英語と数学・物理学・化学、政治経済学のコースを履修した。第３学年になると自然科学から離れ、哲学・心理学・社会学のコースを履修した後、1942年にマニトバ大学を中退した。1943年から1944年にかけて、オタワのカナダ国家映画委員会（the Canadian National Film Board）で働いたようだ。その後、1944年夏にトロント大学の専門課程に入り、社会学や社会人類学などを学んで卒業している。ゴフマンがトロント大学から学士号（B. A.）を与えられたのは1945年11月で（Smith 2003 : 647）、おそらくシカゴ大学の大学院入学後であった。

（３）シカゴ大学時代のゴフマンの「師（mentor）」が誰だったのかという問いは、実は、それ自体が大きな論点になる問いである。２番目の公刊論文（Goffman 1952b）では、ヒューズの方法論である「異事象並置による透視図法（perspective by incongruity）」をゴフマンは採用しており、後になるほどヒューズを「師」と位置づける発言が多くなる。ここで「［ゴフマンは］ウォーナーの指導下にあった」と記述したのは、事実として、1953年12月提出

の博士論文で「指導教官（advisors）」の筆頭にあったことなどに基づく。

（４）（５）1948年９月という時期の推定は、直接には、アンジェリカが修士論文を提出した1950年12月から常識的に逆算して導き出したものである。1949年９月の入学が考えられないのは、第一に、修士論文提出（1950年12月）までの期間があまりに短くなること、第二に、1949年10月にスコットランドに向けて発ったゴフマンと彼女が出会う可能性がほとんどなくなること、第三に、1951年12月掲載の「階級」論文の謝辞にあるアンジェリカからの批評という事実と整合しなくなること、以上３点の理由からである。ただ、1948年９月入学だと、1928年12月生まれのアンジェリカが修士課程に入った年齢が19歳ということなり、それは不可能だとの批判が想定される。しかし、当時のシカゴ大学は、第10学年〔日本の高校１年生〕や第11学年〔日本の高校２年生〕を終えた生徒を大学にリクルートしていた（Riesman 1990 : 56）。大学院でゴフマンの親友となったH. S. ベッカーも、18歳でシカゴ大学を卒業して同大学院に進学している。したがって、アンジェリカが19歳でシカゴ大学の修士課程に入ったことは十分あり得るのである。

（６）ゴフマンの理論的な「懐の広さ」に関して、少し言及しておく。ゴフマンは、トロント大学時代にすでにフロイト（S. Freud）に精通し、ホワイトヘッド（A. N. Whitehead）の哲学を我がものにしていた（Wrong 1990 : 9–10）。また、セント・ジョーンズ技術高等学校卒でマニトバ大学で当初「化学」を専攻したゴフマンは、数学・物理学・化学を得意科目としており、修士論文ではカッシーラー（E. Cassirer）をはじめ科学哲学の文献を挙げて論を展開している（Goffman 1949 : 43）。他方で文学も好きで、プルースト（M. Proust）の本が愛読書であったという（Winkin 1999 : 24）。オーウェル（G. Orwell）の作品は、博士論文の文献表に２冊挙げられている（Goffman 1953b : 366）。社会学の分野でも、トロント大学時代にパーソンズの*The Structure of Social Action*（1937）を読破し、講義に出向いてきたパーソンズに鋭い質問を浴びせている（Wrong 1990 : 10–11）。

（７）*The Erving Goffman Archives*の編集者のシャーリン（Dmitri N. Shalin）は、あるインタヴューの中で、根拠を示していないが、「私は、アーヴィングの最初の妻アンジェリカ・スカイラー・チョート―彼女は上流社会の貴婦人だった―と、アーヴィングの最初の主要な著作『階級ステイタスのシンボル』―そこで彼は、人びとが実際以上に暮らし向きがよく見えるように階級シンボルを操作するやり方を分析している―との間に関連があると見ている」（Fox 2008）と発言している。

（８）ボットは1949年に渡英し（Spillius 2007 : 8）、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（London School of Economics and Social Science）で教職に就いているので（Bott–Spillius 2010）、シカゴ大学のゴフマンに関する思い出は1949年までのものだろう。

（９）修士論文の第11章「居間の家具類」では、確かに「富と名望のシンボル（a symbol of wealth and respectability）」（Goffman 1949 : 69）として居間の家具類を取り上げている。ただし、ハイド・パーク地区に住み専門職の夫をもつ女性たちは、それらを伝統的な意味づけから少し離反した形で用いることによって、伝統的な価値規範に対する自らの位置取りを表出していると述べている。

（10）ゴフマン社会学「らしさ」を一言で表現することはできないが、例えば彼がヒューズから学んだ「異事象並置による透視図法（perspective by incongruity）」という方法もその１つだと考えられる。この方法は、「カモ」論文（Goffman 1952b）でゴフマンが初めて用いている。レマートは、この点に関連して、次のように指摘している。「『階級ステイタスのシンボル』（1951）はかなりスタンダードな社会学である。これと対照的に、『“カモ”をなだめることについて』（1952）において彼［ゴフマン―引用者］は、学者の礼儀作法にはほとんど配慮せずに、手元にある主題に対して彼独自の立場から叙述する方法を初めて開示している。」（Lemert & Branaman 1997 : xxi–xxii）

（11）この1948年秋学期という時期に、1951年刊のパーソンズの*The Social System*をゴフマンが読むことはあり得ない。初期のゴフマンが多大な影響を受けたラドクリフ=ブラウンの戦前の論文には「社会システム」の語が出てくるので（Radcliffe–Brown 1952 : 43, 86, 181ff.）、この可能性が最も高い。だが、その他の可能性もある。1948年以前に「社会システム」の語を用い、ゴフマンが読んでいる可能性があるものとして、1938年刊のバーナードの著書（Barnard [1938] 1968）［次の注（12）も参照のこと］と1935年のヘンダーソンの論文（Henderson [1935] 1970）がある。これら２つは彼の博士論文の文献表に載っている。しかし、この論点に関しては、別に論考が必要であろう。

（12）チェスター・バーナードは、アメリカのニュー

ジャージー・ベル電話会社の社長であったが、各地の経営学大学院で講義もしていた。彼が社長在任中に書いた主著*The Functions of the Executive*（1938）［邦訳『経営者の役割』］は、今日でも経営学の古典として読まれている。この著書の第１部が「協働システムに関する予備的考察（Preliminary Considerations Concerning Cooperative Systems）」で、「協働（cooperation）」「協働行為（cooperative action）」などの語が頻出する。ゴフマンはバーナードのこの本を博士論文の文献表に挙げている（Goffman 1953b : 363）。また、彼はバーナードの別の論文を「階級」論文で参考文献として挙げている（Goffman 1951 : 296）。これらの事実から判断すると、「階級」論文執筆時にゴフマンが1938年刊のバーナードの主著を読んでいた可能性は高い。仮にそうでないとしても、「階級」論文執筆時に彼はバーナードの著作を確実にある程度読んでいる。

（13）実際、博士論文では、理論モデルとしての「社会秩序」は、上記の命題「１」から始まって命題「９」まで、都合９つの命題から構成されている。しかも「会話的相互行為」に関しては、さらに多くの付帯事項が付け加えられている。このような理論の精緻化に至るには、まだ数年の歳月を要する議論の水準にあったとみるのが妥当であろう。

（14）「作業上の合意」という用語がゴフマンによる造語なのか、他の誰かからの借用なのかは現時点では確定できない。だた筆者は、科学用語の「作業仮説（working hypothesis）」をヒントにしてゴフマンが新しく作った用語ではないかと推測している。

（15）この点をめぐっては、「階級」論文では背景に隠れていた理論がゴフマンの博士論文の第22章「投企された自己について」で展開されていると考えられる。用語もほぼ同一のまま、「あらゆる言葉や身振りによって、参加者は自分自身をどう捉え、居合わせる他者をどう捉えているか（his conception of himself and his conception of the others present）を伝えており、その人の言葉と身振りは全てこうした捉え方が表出されたものとして他者に理解される」（Goffman 1953b : 299）と述べられている。

（16）「対面的相互行為（face–to–face interaction）」という用語も使ってはいるが、ゴフマンがその考察対象の位相を表現するときには、これと類似の言い回しである「互いに居合わせた（in each other's presence）」（Goffman 1963a : 13）、「互いに直に身体が知覚できる位置に居合わせた状況で（in one another's immediate physical presence）」（Goffman［1963b］1968 : 23）などを一貫して好んで用いている。

［文献］

Barnard, Chester I. ([1938] 1968) *The Function of the Executive*, Cambridge, MA and London, England : Harvard University Press.

Bott–Spillius, Elizabeth. (2010) "Erving Goffman in Toronto, Chicago and London," in Dmitri N. Shalin (ed.) *Bios Sociologicus : The Erving Goffman Archives.* (http : //cdclv.unlv.edu//archives/publications/ega2.html)

Burns, Tom. (1992) *Erving Goffman*, London and New York : Routledge.

Choate, Angelica Schuyler. (1950) "The Personality Trend of Upperclass Women," unpublished M.A. thesis, Department of Sociology, University of Chicago. in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives.* (http : //cdclv.unlv.edu//ega/)

Fine, Gary A. (1999) "Claiming the text," in (Smith 1999).

Fine, Gary A. and Manning, Philip. (2000) "Erving Goffman," in G. Ritzer (ed.) *The Blackwell Companion to Major Contemporary Social Theorists*, Oxford : Blackwell.

Fox, Renée C. (2008) "Erving Goffman Was a Brilliantly Imaginative, Original Sociologist and a Pathmaking Ethnographer, Who .....," in Dmitri N. Shalin (ed.) *Interactionist Sociology* (http : //cdclv.unlv.edu/archives/ interactionism/)

Goffman, Erving. (1948) "The Role of Status symbol in Social Organization," in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives*. (http : //cdclv.unlv.edu//ega/)

————. (1949) "Some Characteristics of Response to Depicted Experience," unpublished M.A. thesis, Department of Sociology, University of Chicago. in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives.* (http : //cdclv.unlv.edu//ega/)

————. (1951) "Symbols of Class Status," *The British Journal of Sociology* 2, 4 : 294–304

————. (1952a) "Draft of Ph.D. Thesis Statement," in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives.* (http : //cdclv.unlv.edu// ega/)

————. (1952b) "On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure," *Psychiatry : Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3 : 213–31.

————. (1953a) "The Service Station Dealer : The Man and His work," in Dmitri N. Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archives.* (http : //cdclv.unlv.edu// ega/)

————. (1953b) "Communication Conduct in an Island Community," unpublished Ph.D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago. in Dmitri N.

Shalin (ed.) *The Erving Goffman Archive.* (http : //cdclv. unlv.edu// ega/)

————. (1956) *The Presentation of Self in Everyday Life*, Edinburgh : University of Edinburgh, Social Sciences Research Centre.

————. (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York : Doubleday Anchor.

————. (1961) *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis : The Bobbs–Merril.

————. (1963a) *Behavior in Public Places : Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York : The Free Press.

————. ([1963b]1968) *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, New York : Penguin Books.

————. ([1981]2000) "A Reply to Denzin and Keller," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [4], London : Sage.

Gonos, Georg. (1980) "The Class Position of Goffman's Sociology : Social Origins of an American Structuralism, " in Ditton, J. (ed.), *The View from Goffman*, New York : St. Martin's Press.

Henderson, Lawrence Joseph. ([1935]1970) "Physician and Patient as a Social System, " in B. Barber (ed.) *L. J. Henderson On The Social System : Selected Writings*, Chicago and London : The University of Chicago Press.

Lemert, Charles & Branaman, Ann. (eds.) (1997) *The Goffman Reader*, Massachusetts : Blackwel.

Manning, Philip. (1992) *Eriving Goffman and Modern Sociology*, Cambridge : Polity.

Mendlovitz, Saul. (2009) "Erving Was a Jew Acting Like a Canadian Acting Like a Britisher," in Dmitri N. Shalin (ed.) *Bios Sociologicus : The Erving Goffman Archives.* (http : //cdclv.unlv.edu//archives/publications/ega2.html)

Raab, Jürgen. (2008) *Erving Goffman*, Konstanz : UVK Verlagsgesellschaft mbH.

Riesman, David. (1990) "Becoming an Academic Man," in Bennet M. Berger (ed.) *Authors of Their Own Lives : Intellectual Autobiographies by Twenty American Sociologists*, Berkley, Los Angeles and Oxford : Univeristy of California Press.

Simmel, Georg. (1904) "Fashion," *International Quarterly* 10 : 130–55.

Smith, Gregory W. H. (ed.) (1999) *Goffman and Social Organization*, London and New York : Routledge.

————. (2003) "Chrysalid Goffman : A Note on "Some Characteristics of Response to Depicted Experience,"" *Symbolic Interaction* 26, 4 : 645–658.

————. (2006) *Erving Goffman*, London and New York : Routledge.

Spillius, Elizabeth. (2007) *Encounters with Melanie Klein*, London and New York : Routledge.

薄井　明.（2011）「ゴフマン社会学の脱皮の跡―彼の修士論文（1949）に関する一考察―」,『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第18号.

内田　健.（1995）「『ゴフマネスク』とは何か？―E. ゴフマンの著述スタイルをめぐって―」,『新潟大学教育人間科学部紀要』第６号第１号.

Verhoeven, Jef C. ([1993] 2000) "An Interview with Erving Goffman, 1980," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], London : Sage.

Winkin, Yves. (ed.) (1988) *Erving Goffman : Les Moments et Leurs Hommes*, Paris : Seuil/Minuit.

————. ([1992]2000) "Baltasound As the Symbolic Capital of Social Interaction," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], London : Sage.

————. (1999) "Erving Goffman : what is a life? The uneasy making of an intellectual biography," in (Smith 1999).

Wrong, Dennis. (1990) "Imaging the Real," in Bennet M. Berger (ed.) *Authors of Their Own Lives : Intellectual Autobiographies by Twenty American Sociologists*, Berkley, Los Angeles and Oxford : Univeristy of California Press.

Goffmanian Sociology in The "Magnetic Field" of The Study of Social Class : A Note on E. Goffman's First Published Paper (1951)

Akira USUI*

Abstract : Before he first formulated his sociological theory on the interaction order in his Ph. D. disseration (1953), Erving Goffman had contributed two papers to scholarly journals. Contrary to our expectations, his first published paper (1951) appears diverse from the second one (1952) in theme and style, and each writer of the two looks like a completely different person who submitted his doctoral dissertation. This puzzling diversity in appearance resulted mainly from the difference of the interpersonal, biographical and intellectual context in which each of the papers was written, and there was hidden theoretical continuity among the three ones. Of them, the 1951 paper, "Symbols of Class Status", is difficult to see a connection with Goffmanian sociology because the paper was written in the "magnetic field" of the study of social class in his private life as well as his academic one. Taking the influence of the "magnetic field" into consideration, we can find that his new sociological theory on the interaction order had already emerged and developed steadily even in the paper dealing with class symbols.

Key Words : Goffmanian sociology, symbols of class status, the interaction order

* Center for Development in Higher Education